

ピエール・ジャネの心理学における 意識と意志

松浦 宏信

1. はじめに

ピエール・ジャネ（1859–1947）は近代精神医療の礎を築いた人たちの一人に数えられる。パリのサルペトリエール病院で診療に当たりつつ、コレージュ・ド・フランスの心理学講座を三十年余りに渡り担当していた。執筆活動にも生涯力を注ぎ、著書は講義録を含めると十数冊に及ぶ。¹

ジャネの業績を紹介した文献としてまず挙げられのはエレンベルガーの『無意識の発見』²である。もちろんこの本は単なるジャネの解説書ではない。古代の呪医から、動物磁気、催眠療法を経て精神分析へと至る「力動精神医学」の発展史であると同時に、ジャネ、フロイト、アドラー、ユングの学説がそれぞれ詳細に検討されている。しかし出版当時の時代状況が生んだ波及効果により、かつてフロイトが葬り去ったジャネを復興する反精神分析の書であるとみなされるようになった。³

優れた注釈書が原典の命運を左右するようになると、批判者の矛先はまずコメンテーターのほうに向かう。フロイトの一回限りの発見を歴史の大きな流れのなかに回収するばかりか、多くの点においてジャネに優先権を認めるエレンベルガーの見方に対し、立木氏は三つの反論を提示する。①精神分析は、ジャネが治療手段として用いた催眠療法と決別することによってはじめて可能になった。②ジャネは分析治療の重大な一局面である「転移」を観察したにせよ理解できなかった。③そもそも無意識を「下意識」（意識に上らないもの）としかみなさないジャネの心理学理論に精神分析は何も負うところがない。フロイト的な無意識とは「意識から本来的に隔てられた自律的な系」なのである。⁴

①と②は医療行為に関わる議論なので識者に譲るとして、③についてはどうか。たしかにジャネは意識の多層性を解明しつつ、深層意識と表層意識の間の交流に諸々の制限があることを看破していた。しかし一方的に意識と接続した

り断絶したりする精神回路の存在を仮定したことなどなかった。もしそれこそが「無意識」であるとすれば、その「発見」にジャネが貢献したとは到底言い難い。

ところで、ジャネをとりまく近年の研究動向を通覧し、さらには今日の「主流派」である脳科学者の論調を遠くから聞き取る限り、⁵無意識の問題を軸にしてジャネを論評するのはそろそろ終りにしなければならないと思われる。生産的な議論をするためにはジャネの著作を新たに読み替える時期が来ている。

そこで、本論では、新たな読解の方向性を示すために以下二つの作業をおこないたい。

1. ジャネの最初の名著である『オートマティスムの心理学』⁶の議論を成り立たせている指導原理が、意識と意志の区別であることを確認する。「意識か無意識か」という二者択一に縛られてこの著書を読むと誤読の恐れが高まる。
2. 『オートマティスムの心理学』から、中期の代表作である『強迫観念と精神衰弱』に至るまでのジャネの足跡をたどると、意識から抜け落ちて当人を苛む固定観念のメカニズムの分析を進めると同時に、意志の病変に関心を向けていたことがわかるだろう。注意障害や視覚障害などの具体的な事例を通して、ジャネは意識と意志の複雑な絡み合いを検証していた。

2. 意識と意志の区別

『オートマティスムの心理学』は、1889年にソルボンヌ大学文学部に提出された博士論文である。それまでジャネは高校で哲学を教えながら医師の指導のもと臨床実験を積み重ねていた。被験者として長年にわたり協力したヒステリー患者たちは、カタレプシー（全身硬直）、夢遊、健忘、放心、暗示など、その特異な行動形態を統一的に説明する理論へとジャネを導いた。「オートマティスム」とは、個々のコンポーネント間のバランスが崩れ、それぞれが互いに分離しながら自動的に作動し出すことで、複雑さを失い単純化していく活動形態を意味する。「意志」による統合が失われると、この解離傾向の昂進により諸々のヒステリー症状が現れるのである。オートマティスムと意志（に基づく行為）とを峻別する伝統的な二分法をジャネは応用したといえよう。⁷

だが本論の目的は意識と意志の区別を明らかにすることであった。この区別は不随意運動をめぐる以下二つの臆見に対するジャネの反論のなかに読み取れる。

1. 意識は脳内活動に時として伴う不必要な燐光現象であるという付帯現象説
2. 意志を介さない機械的な運動が即無意識的であるという不随意＝無意識説
どちらの説も意識と意志の混同にかかわっている。

2. 1 意識と自意識

そもそも不随意運動 (mouvements involontaires) とは何か。

意志 (volonté) に左右されない生体活動が数多く存在することは古来より認識されていた。意志に全く依存しない心臓の鼓動や消化器官の蠕動運動をはじめ、時と場合によって制御できたりできなかつたりする呼吸、くしゃみ、咳などなど。近代になって概念化された反射運動はこの不随意運動の特殊事例とみなされるだろう。⁸「随意か不随意か」という二者択一の原理は生理学的であると同時に倫理的である。様々な行為は当人の意に沿う場合に限り賞賛ないし非難の対象になるという考え方は遠くアリストテレスにまで遡る。⁹

鐘が三回鳴ったら思わず手を上げてしまうことと不意のくしゃみを同一視する見方には無理があるだろうが、たしかに一群のオートマティスムのなかには、不随意運動の世界を拡張するかに思えるものもある。今や付帯現象説の擁護者たちは色めき立ち、不随意運動の本来の定義を忘れるあまり、「意識が有ろうが無かろうが人間機械はこれほどまどうまく作動するではないか」と口を滑らせてしまう。しかしジャネの反論によれば、彼らは意識と「自我」ないし「自意識 (conscience de soi)」とを取り違えているのである。¹⁰意志が存在するとき、意識は己を中心とした自意識となる。意志が無いところに自意識は象られないが、意識は至るところに有る。「なぜなら意識は生と共にしか消滅しない」とジャネは言う。

最後の発言には唯心論的傾向が顕著に表れている。例えばベルクソンの見解によると、至るところに生を認め、自然のうちに潜むまどろんだ意識が覚醒していく過程に付き従うところこそスピリチュアリズムは存する。¹¹没我的な意識の表出を漏れなく記述しつつレヴェル分けしていくジャネの手際のよさは唯心論者の確信によって裏打ちされている。

それはともかく、付帯現象説の擁護者たちに対してジャネが言わんとしたことを要約すれば次のようになるだろう。すなわち催眠や自然発生的な擬似催眠(カタレプシーや夢遊)の最中にある人の精神状態は、意志が働かない意識レヴェルにまで落ち込んでいる。なにしろヒステリー者の意識は狭い分だけ奥行きを

有する。「意識野の狭窄」のせいで処理されない幾多の感覚は消え去ることなく記憶に留められ、意志の勢力圏外に第二、第三の意識層が形成される。この意識の多層性は催眠とエクリチュールオートマティック（自動書字）によって裏付けられる。催眠は諸々の意識層を逐一表面化させる技法である。誰かとおしゃべりしつつ筆を走らせる患者の姿は、表層意識（自意識）と深層意識が互いに没交渉のまま同時に活動しえることの証左とみなされる。

2. 2 不随意と無意識

このエクリチュールオートマティックに類する現象は当時の心霊研究者たちによって盛んに検討されていた。とりわけウージェーヌ・シュヴールールの『占い棒、いわゆる探知振り子、そして回転テーブルについて』²という著作は、ジャネにとって必読の書だった（ちなみにシュヴールールの本業は化学であった）。なにしろシャルル・リシェの書評によれば、「無意識的な運動 (mouvements inconscients)」の存在を明らかにすることで心理学の一時代を画した業績なのだから。³しかしジャネはこの賛辞に同意しない。

なぜか。シュヴールールによると振り子や占い棒の動きは持ち手の筋肉のかすかな作用の仕業であるという。その筋肉運動は、①意志の産物ではなく、②外界に向けられる思念から生まれ、③意識されていない、というのがシュヴールールの主張である。ところがシュヴールールは②と③の関係を突き詰めていない、つまり当の思念が意識に上らないという肝心の事実を説明していないのである。シュヴールールは、不随意＝無意識という等式に満足することで、霊媒師の神秘を神秘のままにしている。いったい、占い棒、振り子、回転テーブル、さらにはエクリチュールオートマティックになぜ人は引き付けられるのだろうか。それは手が勝手に動くからではなく不意に何かを言い表すからではないだろうか。無意識的に手が動くことと生理的に手が動くことは違う。要するに、「意識されているか否か」という問いと「随意か不随意か」という問いを混同している限り、物言わぬ身体が当人を抜きにして表現媒体へと成り変る諸相に焦点を合わせることなどできない。いわゆる無意識の心理学は意識の領域と意志の領域を区別するときはじめて可能になるのである。

しかしこの区別のためにジャネはそれなりの代償を払った。なにより統合原理と目された意志の出がわからずしまいである。たしかにジャネの試みは意志なきオートマティスムの世界を隈なく観察することに尽きる。内に潜む意識

がタガを外され自動展開する様子から、意志の影（自意識）に隠れて動き続ける手が刻む言葉まで。その一方で、意志は意識を外部からコントロールする能力であるかのように措定されている。この点において『オートマティスムの心理学』は、魂をいくつかの能力に区分けして意志をその上位に置く旧来の心理学¹⁴を脱しきれていないといえよう。ところで十数年後に出版される『強迫観念と精神衰弱』のなかで描かれる意志の姿は全く様変わりしている。

[・・・]なぜ患者はそんな不条理な事をしようとするのだろうか？そのわけが患者には全くわからない、なぜだかわからないけどしたくなるように強要されていると本人には感じられる[・・・]それを成し遂げるように強要されていると意志には感じられるのである（強調著者）。¹⁵

馬鹿げた行いを抑制するどころか、まさに馬鹿げたものとして現れざるをえない意志の受難にジャネはどのような道筋を経て思い至ったのだろうか。その足取りをこれから足早にたどり直してみたい。

3. 意識と意志の絡み合い

3.1 意志薄弱

文学博士号を取得したジャネはパリ大学の医学部に登録すると同時にサルペトリエール病院で働き始める。研修医として再出発したジャネの最初の成果が、「意志薄弱と固定観念の症例研究」¹⁶である。

固定観念についてはすでに『オートマティスム』のなかで論じられていたが、意志薄弱（*aboulie*）は全く新しいテーマである。ジャネにとって意志は有るか無いかのどちらかだった。意志が存在するとき意識は己を中心とした自意識となり、意志の及ばないところでは脱中心化して自動展開し続ける。この割り切った見方をジャネはひとりの患者とともに変えていく。

大柄でたくましいマルセルは動くことに難儀を感じる女性である。体を動かすように言われると、「できない」といってあきらめてしまう。かと思うと突然部屋の窓を開けて飛び降りようとする。普段は窓を開けようかどうかためらい続ける彼女がそのときばかりは俊敏な動作で鍵を開けてしまう。

マルセルの日常をよくよく観察すると、流れにまかせるままの習慣的で機械的な動作はほぼ維持されていることがわかる。その一方で、彼女の体は自分か

ら何かをしようとするときに限って動かなくなってしまうようである。やはりマルセルには意志が無いのだろうか。

診察を進めるとマルセルの頭の中はかなり混乱していることがわかった。同じ観念が繰り返し現われては思考の流れを中断させている。この固定観念がすべての元凶なのだろうか。

ジャネはマルセルの病歴を調べ、15歳の時に重いチフスにかかっていた事実に着目する。長い闘病生活が彼女の意欲を日増しに削ぎ落とし、その結果、不能感、自責の念、現実逃避的妄想が徐々に組織化されていったのであろう。つまり始まりは固定観念ではなく意志の減退にあったと考えられる。

日常生活を送るためには「ほんの少しの意志」があればよい、ただしそれが絶えず要求されるところに社会環境の厳しさがあるとジャネは言う。『オートマティスム』の読者には驚くべきことだが、今やジャネは患者の意志を触発して可能な限り維持する治療を試みる。

ジャネはマルセルとおこなった治療を振り返って、彼女の精神には様々な観念体系が「地層のように」折り重なっていたと述懐する。妄想をひとつ除去するとさらに深刻な妄想が新たに掘り起こされたのである。治療が進んだあるとき、マルセルは「食べるな、おまえなど食べる必要はない」という幻聴に悩まされ始めた。これは失恋したときに彼女が抱いた餓死願望の再現である。危険を察知したジャネは、「食べなさい、私はあなたに食べてほしいのです」という暗示を施す。最初はうまくいったが次第に暗示の声と幻の声とが彼女のなかで交錯するようになり、「もういや、私は食べたくない」と叫び出すようになった。治療者の意志を介して患者の内に葛藤が生まれ、当人の意志が芽生えた途端に、その意識は我に返り食べ物は異物として放棄される。意志が意識に吐き気を催させるかのようである。ジャネはこのメカニズムを実証的な仕方で究明しようと試みる。

3. 2 注意不能

意志薄弱の問題は、『ヒステリー者の精神状態』⁷⁾の第一巻第三章で再び取り上げられることになる(ちなみに第二巻はジャネの医学博士論文である)。今回はケーススタディーではなく一般論が展開されるが、そのなかでジャネは「注意不能 (aprosixie)」と呼ばれる症状の重要性を強調している。例えば新

聞を読んでもその内容がほとんど頭に入ってこないような場合は注意不能が疑われるという。

しかしなぜこの症状が意志薄弱に通じるのだろうか。言い換えるとなぜ意志そのものではなく注意が問題になるのか。

意志はたんに運動の作用因であるだけでなく、理解力において欠くべからざる役割を果たす。ヴントやバスチアンに習って、この知的機能こそ第一のもので、行為はその外的な現われでしかないと私には思われる。この観点からみると意志は注意と名づけられる。

こうして意志は注意に転身し、刺激に対する反応時間¹⁸や感覚の変動などを通して数値化される。それは今や測定の対象になったのである。ジャネは視野の変化を調べることで注意＝意志の働きをあぶり出そうとする。

方法： 視野計の中央に数式の書かれた紙を貼り付けておく。被験者は片目を閉じて紙を注視し暗算するように指示される。被験者が集中し始めたことを確認した後、実験者は先端に白い物体がついた棒を視野計のほうにゆっくり近づけ、被験者の通常時の視野境界のところでしばらく静止させる。そして被験者に計算をやめさせ、果たして白い物体が見えていたかどうかを尋ねる。

結果： 健常者の視野はほとんど変化しないが、ヒステリー者においては視野の著しい狭窄が確認された。¹⁹

説明： 何かに注意を向けるために、ヒステリー者はそのわずかばかりの精神力をすべて動員して残りすべてのことを一時的に犠牲にしなければならない。それまでは維持していた感覚を放棄してしまうわけである。²⁰

この実験環境は必ずしも人工的なものではない。なにしろ日常生活もまた微量の注意＝意志を私たちに絶えず要求するのだから。ヒステリー者の意識は切り詰められ続け、もし意識を保とうとすれば、注意＝意志を弱めるしかない。意志薄弱は一種の防衛反応であると言い得る。

3.3 見ようとするが見えないものも見えている

注意＝意志がヒステリー者の視覚に及ぼす影響をジャネはさらに解明しようと試みる。

まずは「ヒステリー性半盲症の一症例」²をみてみよう。患者はジュスティーンと呼ばれる42歳の女性である。コレラ恐怖に苛まれた彼女の病歴は直近の論文²のなかで詳しく語られているが、今回論じられるのはその後日談である。

幾多の固定観念から解放されしばらく良好だったジュスティーンの状態は不正子宮出血により暗転する。因果関係は不明だが、これを機に彼女は奇妙な視覚障害に悩まされるようになった。まず残像、つまり何かを注視するとその視覚像が持続する。そして半盲。同じく何かを注視していると向かって右側の像がだんだん消えていき、左半分しか見えなくなる。症状が悪化した現在では何かを見るたびにその左半分しか見えなくなってしまった。おそらく何らかの脳障害が起こったのだろうと推測しつつジャネは詳しい検査にとりかかる。まず視野の広さは症状発生以前と同じく極めて変動しやすい。注意は視野を狭めるばかりか内向斜視（瞳が鼻のほうに寄る）をも引き起こすようになった。そしてなよりの特記事項は、「両眼視」の機能がほぼ喪失している、つまり彼女は両目を開けていても片方の目でしか見ていないのである。ちなみに現在の彼女の左目の視野は向かって右半分（鼻側）が失われ、右目の視野は左半分（同じく鼻側）が喪失している。もし「右側が見えない」という本人の言葉を信じるなら、左目だけでしか見ていない場合が多いと推察される。

しかし視界の半分は本当に見えていないのだろうか。ジャネはジュスティーンに、「私のおでこにある紙が見えたら手を上げなさい」という暗示をかけてみた。そして目覚めた彼女の前に立つ。やはり「（私から見て）先生の左半身しか見えません」と言う。ジャネは彼女にゆっくり近づき、アシスタントがジャネのおでこの右端にこっそり紙切れを貼り付ける。すると彼女の手は上がった。しかし本人は「何も見えませんでした」と明言する。そこでジャネは意識に上らない視覚が及ぶ範囲を例の視野計を用いて調べようと試みる。今度は「棒の先端の紙が見えたら手を上げなさい」と暗示すればいいだろう。すると両目の視野はどちらも本人が言うより広いことがわかった。注意して見ようとすると見えないものも意識されずに見えているのである。

以上の論文と補完関係にある「両眼連合過多による視覚障害」³と題された症例研究を最後に取り上げておきたい。年代的には『強迫観念と精神衰弱』の出版後に発表された論文であるが、半盲症研究と同一線上にあることはたしかである。

患者は65歳の女性である。左目に映る閃光とそれに伴う激痛に耐えかね自殺をほのめかすようになった彼女を見かねた担当医は、視神経の切除手術に踏み切る。術後しばらくすると痛みが治まりだし閃光も消えた。これで比較的良好な右目だけの生活が始まると思った矢先、彼女の視界にもやもやが拡がりだした。読書はおろか室内を歩くことさえままならない。こうした状態にある婦人がジャネに託された。

彼女が若い頃から数多くのヒステリー障害に見舞われていたのを確認したジャネは詳しい検査に着手する。もやもやは、特定のものを注視したり、ひとつひとつの単語を読んだり、物を持ち上げたり、見知らぬ人と会話をしたり、要するに「緊張」が要求される場合に限って発生することがわかった。逆にボンヤリしている時は視界良好である。さらに、盲目なはずの左目に光が入らないように照明を設置したり、右目だけで見るような特殊なめがねをつけるともやもやは消えた。どうやら左目はまだ生きている、正確に言えば、緊張＝意志の高まりにより両眼視の習慣が自動再生してしまうとき目の前が曇り出すのである。意志がひとつのことに向かえば制御されるべき機能も増えていく。もはやオートマティスと意志は区別されずに互いを巻き込み合う。

4. 結論

ジャネは無意識ではなく意識と意志という二つ極性を見出していた。この着想が本論の出発点であり結論でもある。論を進めていくなかで、意志が「注意」や「緊張」に変貌し哲学的な衣を脱ぎ捨てていく過程が浮かびあがった。後にジャネは(心理的)「傾向(tendance)」という概念を編み出すに至るが、これはいわば意志が最後の変態を遂げた姿ではないかと推察される。このジャネの思考の変遷をさらに追跡することが今後の課題となる。

このように意志のほうに焦点を合わせることで、ジャネの心理学とベルクソンらの「生の哲学」との相違も見えてくるだろう。²⁴外界に適應して自己保存を図る実利的な性向を反転する時かろうじて意識される「純粹意志」²⁵つまりエランヴィタル(生の飛躍)にリアリティーを見るベルクソンの哲学は、患者の意欲を高め社会環境との接点を再構築しようとするジャネの医療実践を仮象の賜物として廃棄しかねない。

冒頭に述べたように、ジャネは「意識の与り知らない暗闇の領域」²⁶など仮定する必要はないという立場をとった。このために意志をXとせねばならな

らなかつたが、徐々にその本性が解明されていくなかで、注意や緊張に呼応して意識されたりされなかつたりする認知プロセスが観察された。その明暗の変転は抑圧の結果ではなく制御（コントロール）機能の不具合によって説明される。要するに「意識の機能不全」²⁷と言ってもさほど問題はないが、認識論的には、Aという現象が起こりうる必須条件を見定めることと因果関係を決することは違う。ジャネは真理を作り出す思想家ではなかつたが、仮説を真理と取り違え目の前の事実を見逃すことを戒める学者ではあつた。この実証的傾向が不毛であつたとは思われぬ。例えば本論で取り上げたヒステリー者の視覚障害の調査と、今日の認知科学においてしばしば話題となる「盲視」²⁸現象の研究との間にかすかな糸を感じ取ることはできないだろうか。知の歴史には思わぬバイパスが至るところに見出されるのである。

注

- 1 本稿ではラルマッタン社の復刻版を用い、タイトルの後に初版出版年を付記する。
- 2 アンリ・エレンベルガー、木村敏・中井久夫訳、『無意識の発見』、弘文堂、1980。
- 3 ハッキングによると、『無意識の発見』の原著が出版された当時（1970）の北米では多重人格が社会問題化しつつあつた。そんな折に「図らずも」エレンベルガーがジャネを発見する。およそ100年前の心理学者が解離症状に関する数多くの臨床報告を書き残していたという事実に人々は驚き、方や解離のメカニズムの分析をなおざりにしていたフロイトが槍玉に挙げられる。こうして「多重人格運動」はジャネを開祖とする反精神分析運動の様相を帯びた（イアン・ハッキング、『記憶を書き換える』、早川書房、1998）。この動向に対する精神分析の側からの反応は2つの傾向に分けられる。①歴史の書き直し。ルディネスコによると、ジャネの学説はフランスへの精神分析の導入を遅延し歪曲する「ろ過装置」として機能した。（Elisabeth Roudinesco, *Histoire de la psychanalyse en France*, Fayard, 1994）。②精神分析の徹底。齊藤氏によると、フロイトによって乗り越えられたジャネに再び舞い戻るのは知的退行以外の何ものでもない。多重人格もまた「精神分析化」すべきである。いわく「すべての解離現象は「抑圧」の変形と考えることができる。あらゆる防衛機制のマトリクスとしての「原抑圧」を考えるなら、ここを基盤として、発達過程において学習によって修得される二次的な防衛機制が「解離」なのではないか。そう、解離は原抑圧から分化した、やや高次の防衛機制なのであり、この点では抑圧の根源性に一步譲らざるおえない。」（齊藤環、『解離のポップスキル』、勁草書房、2004）。

- 4 立木康介、「シャルコー/ジャネ」、『哲学の歴史9』、中央公論新社、2007。
- 5 例えば、Lionel Naccache, *Le nouvel inconscient. Freud, Christophe Colomb des neurosciences*, Odile Jacob, 2006.
- 6 Pierre Janet, *L'automatisme psychologique* (1889), L'Harmattan, 2005. 原題を直訳すれば『心理自動症』であるが、本稿では試みに『オートマティズムの心理学』とした。
- 7 Laurent Fedi, « Automatisme et volonté dans la thèse de Pierre Janet », *Psychiatrie, Sciences humaines, Neurosciences*, vol. 5, février 2007, p. 36-47. フェディが引用しているディドロの定義によると、オートマティズムは「ドゥ・レオミュール氏によって考案された用語。動物の自動的な特性、つまり意志が何ら関わることなく、生体組織のみに依存する運動システムを意味する」。
- 8 ジョルジュ・カンギレム、金森修訳、『反射概念の形成』、法政大学出版局、1988。
- 9 アリストテレス、高田三郎訳、『ニコマコス倫理学』、岩波文庫、1971、上巻、83ページ以下。カンギレム、同上、177-178ページ参照。
- 10 「自意識」はジャネがデルプフの著作から引用している言葉。当のジャネは「自我（観念）」ないし「人格（観念）」という用語のほうを好むが、本稿では論の展開上「自意識」のほうを使用する。Cf. *L'Automatisme psychologique*, p. 78.
- 11 アンリ・ベルクソン、河野与一訳、『思想と動くもの』、岩波文庫、1998、366、374ページ。
- 12 Michel Eugène Chevreul, *De la baguette divinatoire, du pendule dit explorateur et des tables tournantes, au point de vue de l'histoire, de la critique et de la méthode expérimentale*, Mallet-Bachelier, 1854.
- 13 Charles Richet, « Les mouvements inconscients », M. Berthelot, etc., *Hommage à Monsieur Chevreul*, Alcan, 1886, p. 79-94.
- 14 例えばアドルフ・ガルニエ（1800-1864）の心理学が挙げられる。ガルニエは魂を「感性」、「知性」、「意志」の三部門にわけ、意志が感性や知性に介入することで精神状態に変化が生じると考えた。Cf. Serge Nicolas, *Les facultés de l'âme*, L'Harmattan, 2005, p. 68.
- 15 Pierre Janet, *Les obsessions et la psychasthénie* (1903), L'Harmattan, 2005, tome I, p. 163-164.
- 16 Pierre Janet, « Étude sur un cas d'aboulie et d'idées fixes » (1891), reproduit dans : Pierre Janet, *Névroses et idées fixes* (1898), L'Harmattan, 2007, chap. I.
- 17 Pierre Janet, *L'état mental des hystériques* (1893-1894), L'Harmattan, 2007, vol. I, chap. III.
Janet, *Ibid.*, vol. I, p. 133.
- 18 Pierre Janet, « La mesure de l'attention et le graphique des temps de réaction » (1896), reproduit dans *Névroses et idées fixes*, chap. II.
- 19 Janet, *L'état mental des hystériques*, vol. I, p. 76.
- 20 Janet, *Ibid.*, vol. I, p. 138.

- 21 Pierre Janet, « Un cas d'hémianopsie hystérique » (1895), reproduit dans *Névroses et idées fixes*, chap. VII.
- 22 Pierre Janet, « Histoire d'une idée fixe » (1894), reproduit dans *Névroses et idées fixes*, chap. IV. 松本雅彦訳、『解離の病歴』、みすず書房、2011、第二章。
- 23 Pierre Janet, « Un trouble de la vision par exagération de l'association binoculaire » (1907), reproduit dans *L'état mental des hystériques* (vol. III, 1911), L'Harmattan, 2007, chap. III.
- 24 Arnaud François, *Bergson, Schopenhauer, Nietzsche. Volonté et réalité*, PUF, 2008.
- 25 ベルクソン、真方敬道訳、『創造的進化』、岩波文庫、1997、282 ページ。
- 26 Janet, *L'automatisme psychologique*, p. 346. Cf. Serge Nicolas et Laurent Fedi, *Un débat sur l'inconscient avant Freud*, L'Harmattan, 2008.
- 27 立木、同上。
- 28 Naccache, *op. cit.*